

特別養護老人ホームで介護に従事する介護福祉職の「協働するちから」に関する調査研究

松永繁¹⁾

1) 新潟医療福祉大学 社会福祉学部社会福祉学科

【背景・目的】 現在、介護現場において、在宅、施設問わず、福祉系以外の他分野からの社会人を受け入れるなど、多様な人材が入職し介護に従事している。言い換えれば、多様な背景を持った介護福祉職が介護に従事していると言える。

特別養護老人ホームでは、多数の介護福祉職がチームを組み利用者の介護を行っているが、先行研究では、介護福祉職の協働に関する課題が報告されている。

本研究では協働するちからに注目する。協働するちからとは、非認知能力の社会情動的能力 (OECD 2015) に含まれ、育った家庭・地域環境や教育環境などが影響しながら経験を通して形成されるものである。

以上の先行研究の整理から、介護福祉職の協働に関する課題の要因として、介護福祉職の協働するちからの存在が背景にあると仮説を立て、介護福祉職の協働するちからの現状と課題について検討することを目的とする。

【方法】

1) 対象者と方法

3か所の特別養護老人ホームに勤務する介護福祉職6名を対象とした。機縁法を用いて対象者を選定し、本研究の目的や方法を説明したうえで協力の得られた6名にインタビューを実施した。

性別では男性2名、女性4名、年齢別では50歳代が1名、20歳代が5名であった。取得資格はすべてが介護福祉士を保有していた。

インタビューは半構造化面接にて実施した。

調査実施期間は平成31年6月～平成31年9月の間で実施した。

2) 分析方法

ICレコーダに録音したデータを逐語録として作成した。その後、質的分析方法であるSCAT (Steps for Coding and Theorization) を用いて分析を行った。

3) 用語の定義

協働するちから

人間関係を形成・維持し業務を遂行するために、特定の環境・状況と相互作用しながら、その場の環境・状況にふさわしい行動ができるちから。

4) 倫理的配慮

本研究は日本社会事業大学倫理審査委員会の承認を得て実施した (承認番号 18 - 1102)。なお、関連する利益相反はない。

【結果】 協働に関して課題を持つ介護福祉職の特徴として、①自己中心的な行動をとる、②コミュニケーションを拒否する、③プラスの業務をこなせない④本音が話せないという特徴が示唆された。

【考察】

① 自己中心的な行動をとる

自身の業務と他者の業務を明確に線引きしており、たとえ気づいていたとしてもフォローをしない。つまり、業務の線引きという形で割り切っている介護福祉職の存在が示唆される。

② コミュニケーションを拒否する

介護福祉職は、相手を大切にするような言動の有無が協働に関係している。相手を大切にする言動の中には、挨拶やねぎらいの言葉かけがある。

③ プラスの業務をこなせない

プラスの業務がこなせないとは、自身の役割、担当以外の間接業務への関心・気づき・対応がないことを指している。また、プラスの業務をこなせない介護福祉職とは、自分が置かれている状況の文脈を解釈し、見通しを立てて段取りを組み立て、行動していくことが苦手であることが考えられる。

結果、他の介護福祉職に業務のしわ寄せがきてしまい、心身共に負担を被ることになり、このような介護福祉職との協働を避けたいと考えている。

④ 本音が話せない

介護福祉職は、無意識的に愚痴を言い合ったりしながら精神的な負担を軽減させていることが考えられる。ここで愚痴とは、介護福祉職が感じた大変だった業務を他者に伝えることであり、利用者への批判や否定と同じではない。

介護福祉職同士、愚痴による本音が話せないことで仲間意識が希薄となり、協働していく中で違和感を覚える要因となる。

以上、みてきたこれらの共通した特徴として、他者へ関心を持ち、気遣いをしながら、状況の文脈を解釈・理解し、行動に移していくことに難しさをもつということが考えられる。

【結論】 特別養護老人ホームにおいて、協働に関して課題を持つ介護福祉職の存在と、①自己中心的な行動をとる、②コミュニケーションを拒否する、③プラスの業務をこなせない④本音が話せないという特徴が示唆された。

また、課題の要因として介護福祉職の「協働するちから」が背景にあることも示唆された。

よって、介護福祉職が介護現場において、「協働するちから」を熟達化させていくための学びの必要性が考えられる。